文化財をたずねて

No.30

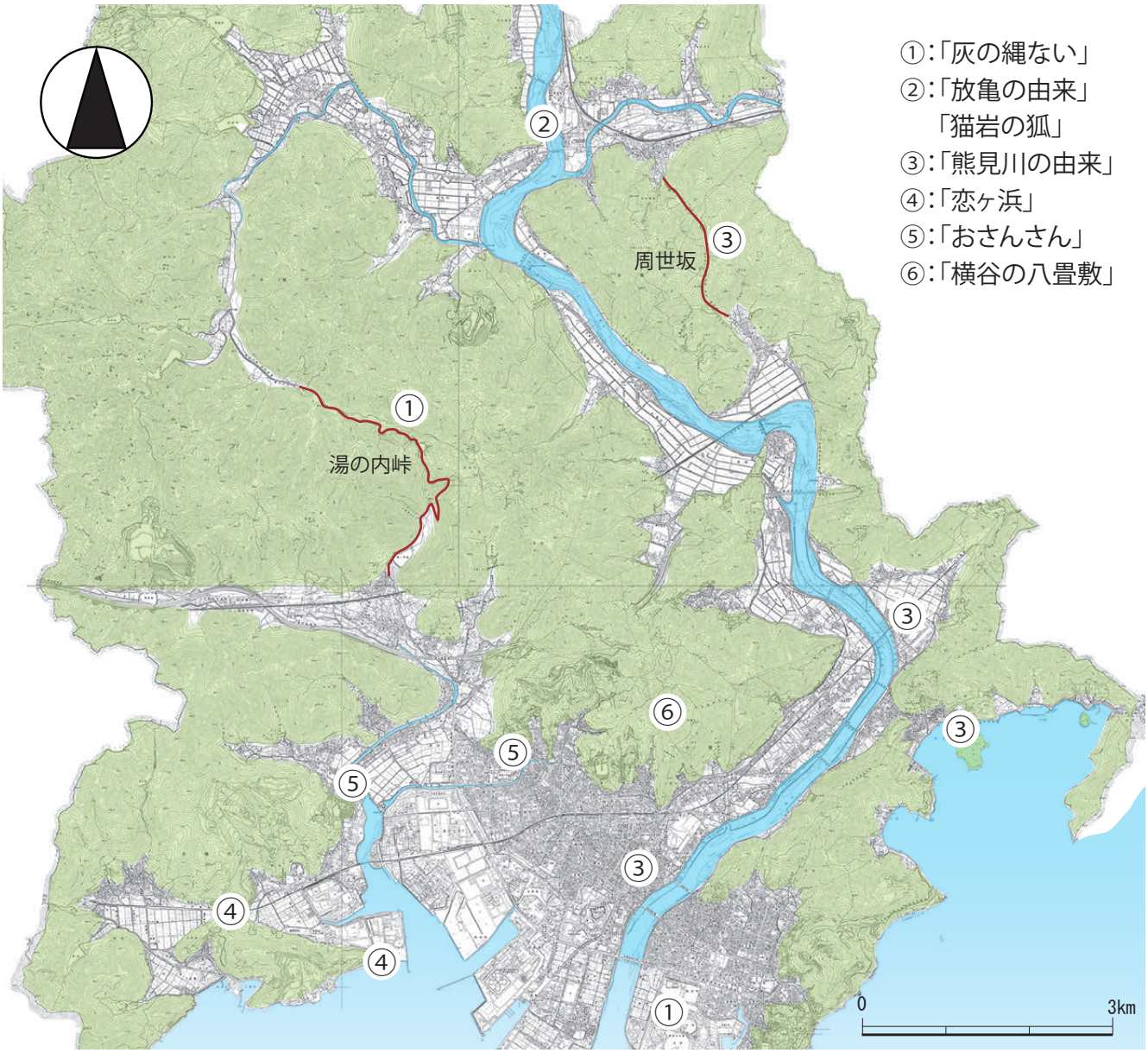
むかしばなしの舞台をたずねて①

発行　赤穂市教育委員会
編集　文化財課文化財係
（赤穂市加里屋 81　TEL:43-6962 FAX:43-6895

古くから地域に伝えられてきた昔話（民話・説話・伝説・伝承・言い伝え）には、面白い話や悲しい話、笑い話や不思議な話など、さまざまな話が伝えられている。こうした昔話は事実や歴史を必ずしも語るものではなく、娯楽や教訓といった面もあるが、その背景には土地の文化や特徴が色濃く表れている。赤穂市内でもさまざまな場所を舞台に昔話が語られ、その土地の文化を伝えている。

「むかしばなし」を知ったうえでその舞台を訪れれば、現代の我々が忘れてしまった昔の人々の土地に対する「感覚」や「思い入れ」、そして文化を再発見できるだろう。

（本誌で紹介するむかしばなしは、赤穂市教育委員会の刊行した『赤穂のむかしばなし』第１・２集に掲載されているものです。掲載にあたっては、一部文章の表現を改めています。）



本号で紹介するむかしばなしの舞台

①灰の縄ない（有年）

むかし、このあたりを治めた代官（だいかん）は大変に欲深く、お百姓にたくさんの年貢（ねんぐ）を出すように命令する悪代官でした。さらに「働けなくなった年寄を養うことほど無駄なことない。年寄をみんな山へ捨てにいけ！」とまで言い出しました。

ところがこの村に、人一倍に親孝行（こうこう）な若者がいました。若者は床下に穴を掘り、そこに年老いて寝たきりになった自分の父親をかくまいながら暮らしていました。

あるとき、悪代官は「灰で縄をなって（作って）、差し出せ。それができないなら年貢を倍にする！」と言い出しました。村じゅうが「灰で縄をなうことなんてできない。かといって倍の年貢を差し出せる余裕もない。」と大騒ぎになり、村人全員、思案にくれていました。

親孝行な若者も困り果て、年老いた父親に相談しました。すると父親は笑って「灰で縄はなえないが、縄のまま灰にすることはできるぞ。まず赤穂へ行って、塩を作るときにできる苦汁（にがり）をもらってこい。この苦汁を藁（わら）に染み込ませ、固く縄をなって油を塗って火を付ければ、苦汁を含んだ灰は崩れずに縄の形のまま残るんや。」と言いました。

若者が父親の言うとおりにしてみると、見事に灰の縄ができました。これを悪代官に差し出すと、悪代官は見事な灰の縄に驚き、村人から年貢が取れないことに最初はがっかりしました。しかし、すぐに若者に感心し、「恐れ入った。どのような方法で灰の縄を作ったのか申してみよ。望みの褒美（ほうび）をとらせよう。」と言いました。

若者は、寝たきりの父親を山に捨てずにかくまっていること、その父親から作り方を教えてもらったことを話すと、「褒美は何もいりません。年寄を山に捨てさせることだけはやめてください。」といいました。

さすがの悪代官も若者の心に感動し、悔（く）い改めました。それから年貢は軽くなり、年寄は村の宝といって大切にされるようになりました。かつて年寄が捨てられていたという西有年の姥捨（うばすて）の山は、それからは「命山（いのちやま）」と呼ぶようになったそうです。

命山（西有年・湯の内）

赤穂の塩田（県立赤穂海浜公園・塩の国）

この昔話に登場する「命山」とは、横山（西有年）と大津の間にそびえる山間部のことで、現在は「湯の内」とよばれている。山深く、人里からも離れているため命がけで峠を越えなければならないことから、湯の内峠のことをかつて「命坂（いのちざか）」とも呼んだという。

また海岸から離れた有年に伝えられた昔話にも関わらず、塩づくりでできる苦汁を使って難題を解決するなど、塩づくりが盛んであった赤穂ならではの昔話である。

②放亀（ほうき）の由来・猫岩（ねこいわ）の狐（有年）

有年楢原（ならばら）のとある場所は千種川の川岸で、いつも洪水で田んぼが流されてしまう場所でした。ある日、お百姓が洪水のあとに田んぼにいくと、一匹の亀が泥にまみれて、もがいていました。

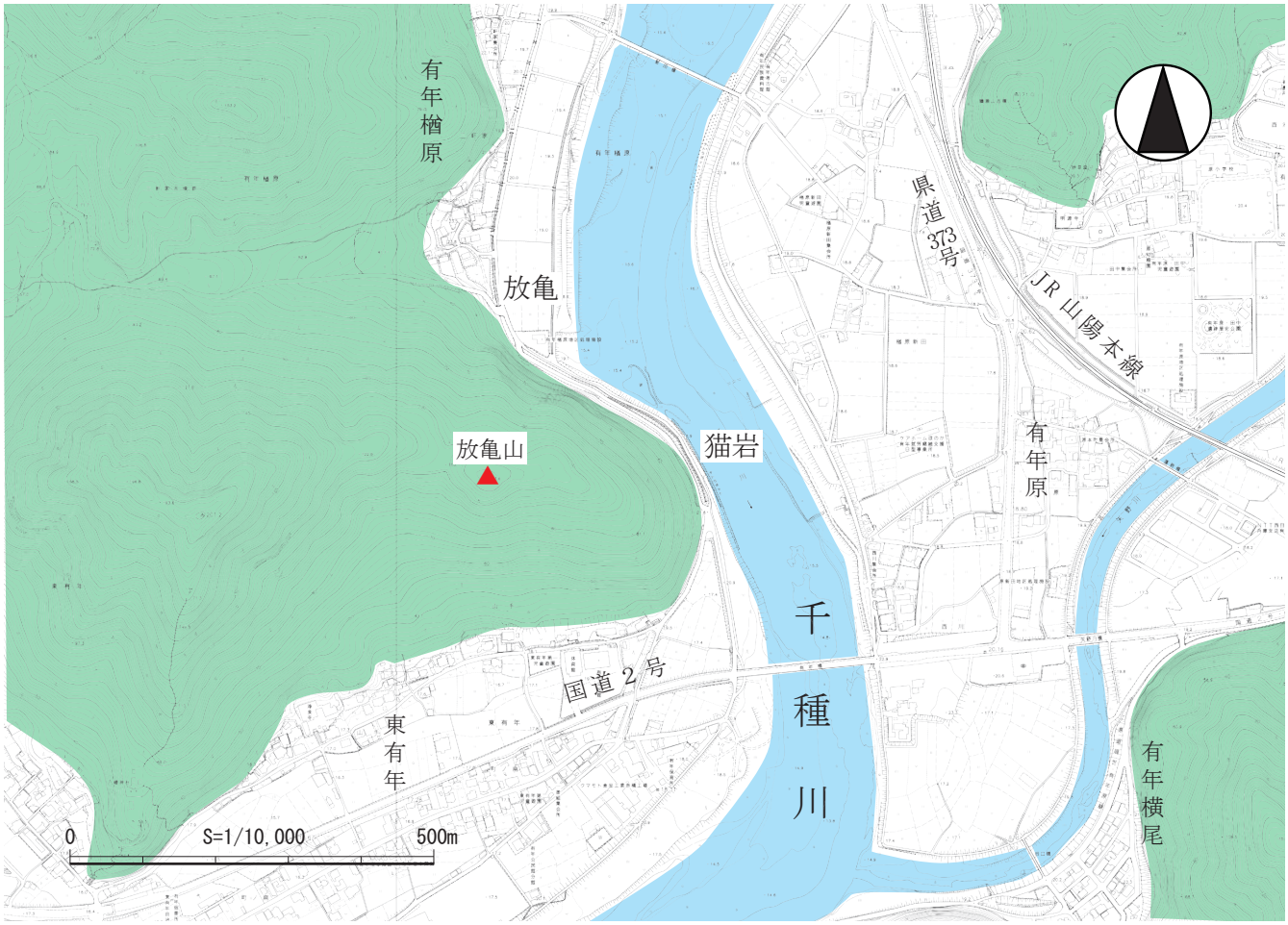
これをかわいそうに思ったお百姓は、亀を泥から救いあげ、水できれいに洗って千種川へ返してやりました。亀は喜んでいるように手足をバタバタと振りながら、川へ帰っていきました。

次の年も、洪水で田んぼにたくさんの泥が流れてきてしまいました。しかし、それまでとは違った事がありました。洪水で流されてきた泥はとても肥えた豊かな土だったのです。そこに植えた稲は、これまでの倍以上の稲穂を付けました。豊作が続き、お百姓の生活はしだいに豊かになっていきました。

放亀（有年楢原）

そのうち、誰というなく「亀を助けたからと違うか？」「亀の恩返しやで！」といいだしました。そして、亀を放してやった場所を「放亀」と呼ぶようになったということです。

この放亀という場所には、川の水面から5mぐらいも突き出したとても大きな岩がありましたが、猫



「放亀の由来」・「猫岩の狐」の舞台

の姿に似ているので「猫岩」と呼ばれていました。岩の上は子供が何人も寝転ぶことができるほど広く、岩の底には大きなウナギの主(ぬし)や河童が住んでいるといわれ、子どもたちの遊び場になっていました。

ある日、子供たちがいつものように猫岩で遊んでいると、猫岩の上で白い花嫁衣装を着た女が、異様な目つきで子どもたちをにらみつけているのです。その女は、猫岩のまわりで遊ぶ子どもたちのほうへ向かって歩いてきます。

見知らぬ女の異様な姿に、子供たちは「こっちへ来(き)よんがな！はよぅ逃げぇ！」とわれ先に逃げ回り、泣き叫ぶ子や逃げようとして転げ落ちる子など、大騒ぎになりました。やっとのことで川岸までたどり着いて後ろを振り向くと、どこにも女の姿は見えません。怖くなった子どもたちは、家に飛んで帰りました。

このことを家でおじいさんに話すと、おじいさんは「ああ、あの猫岩はなぁ、昔から鹿や狐が水を飲みに山から降りてくる場所なんじゃ。人間がおったんで、狐が女に化けて水を飲みにきたんやろ。いつまでも遊んどったら、騙(だま)されて山へ連れていかれるど。はよう帰らんとあかん、あかん。」と話してくれました。

それからというものは、猫岩に近づく子供はいなくなり、遊んでいても早く家に帰るようになりましたとさ。

この昔話に登場する「放亀」は有年楢原にある地名で、有年楢原と東有年の境界にあたり、千種川が山に迫る難所になっている。

このむかしばなし以外にも、かつて千種川の川漁師が魚を売りに行くときに、釣った亀をこの場所で放していたから「放亀」という地名になったという話もある。また川が作る断崖(だんがい)のことを「歩危（ほけ・ほき）」というが、「歩危」が訛(なま)って「放亀」となったともいわれる。

「猫岩」はこの放亀の南側（東有年側）にあった大きな岩のことで、江戸時代の千種川を描いた絵図でも「猫岩」との名前がみえる。むかしばなしでは子供たちが川遊びをする場所とされているが、実際には深みや流れがあるため「危ないので遊んではいけない」といわれていたという。

猫岩そのものは河川改修によって現在は姿を消しているものの、川面から大小の岩が飛び出しており、その名残をみることができる。

「猫岩」付近（有年楢原）

③熊見川の由来（木津）

むかしむかし、大和朝廷の聖徳太子の側近に秦河勝（はたのかわかつ）という人がいました。聖徳太子が亡くなると、河勝は朝廷の政治の争いに巻き込まれるのが嫌で、坂越へやってきました。

河勝は坂越を本拠地にして、水田の開発や養蚕（ようさん）の技術を赤穂に広め、地域を豊かにしていきました。ところが、揖保川の近くに古くから住む豪族が、矢野の豪族と共に、河勝を攻め滅ぼして千種川の土地を自分たちのものにしてしまおうと、周世坂（すせざか）を越えて攻めてきました。

周世坂（周世）

河勝は家来を集めて戦いの作戦を練りますが、良い案はでません。そのうちに敵は高野（こうの）までやってきました。敵が高野に着いた頃、あたりはすっかり暗くなっていました。そのため、敵は高野に陣取り、次の日の朝には一気に河勝の本拠である坂越へ攻め込もうと準備をしていました。

高野

すると河勝は、十五歳くらいの娘を十人集めさせ、その娘たちに秘策を与えました。真夜中に娘を連れた河勝の軍勢は、ひっそりと高野に進みました。

しばらくすると娘の一人が「熊をみたぁー！助けてー！」と敵陣に飛び込みました。続いて次の娘は「虎が出たぁー！助けて―！」「大蛇がきたぁー！助けてー！」と次々と敵陣に飛び込みます。娘に助けを求められた敵の兵士は、ねぼけまなこで右往左往。そこを一挙に河勝が攻め込み、敵軍を追い払ってしまいました。

この「熊を見た」という河勝の計略から「熊見川」という名前がついた、という話です。

揖保川周辺や矢野（相生市矢野）の豪族が通った周世坂は、現在の県道 457 号に相当する。周世地区から有年横尾地区の国道２号（近世山陽道）へ抜ける峠道で、江戸時代前期に高取峠を越える道が一般的になるまでは、赤穂から周世坂を通って姫路方面へ向かうことが多かった。

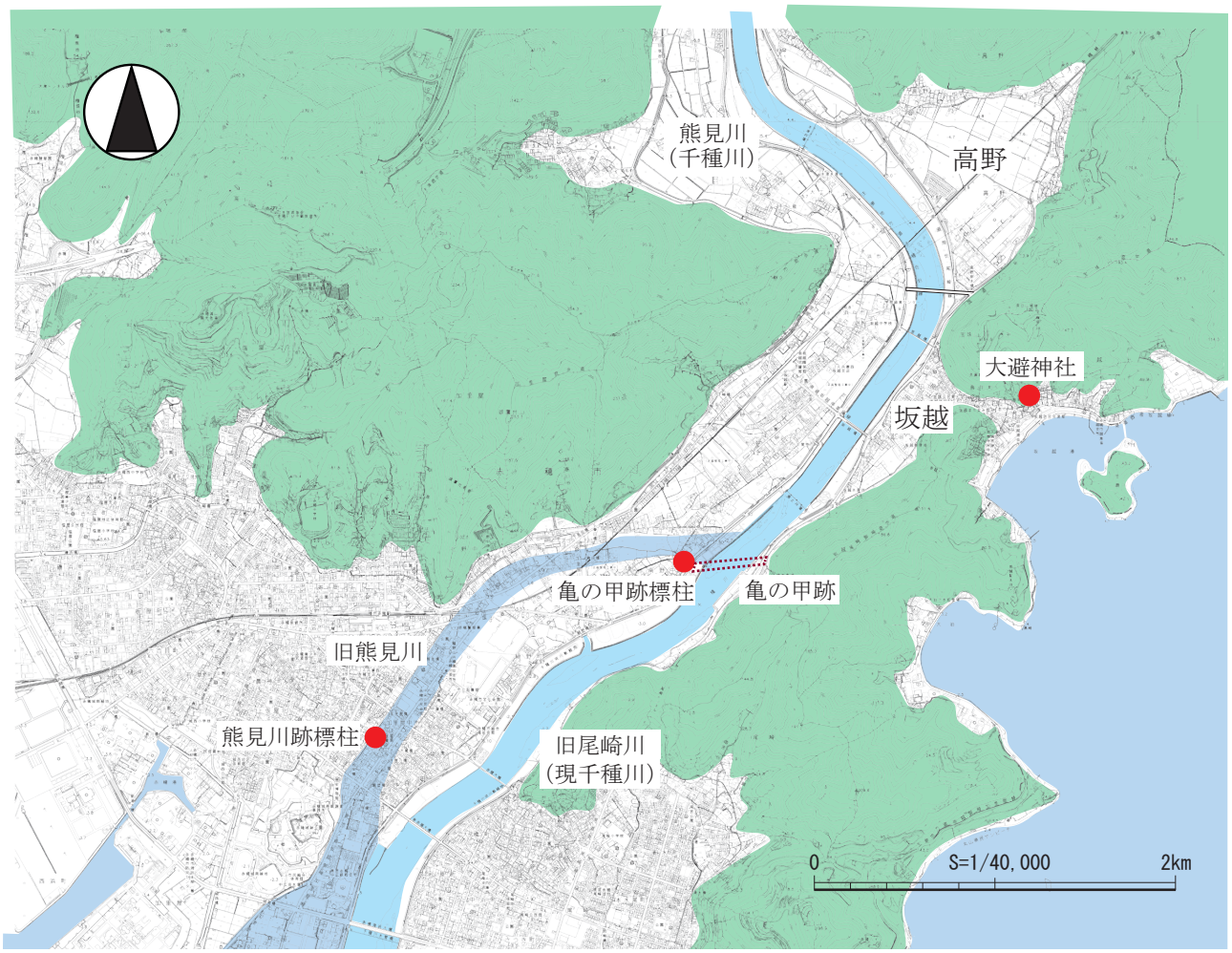
「熊見川」は千種川の別名である。江戸時代の赤穂城下町を描いた絵図でも千種川のことを「熊見川」と記載しているものがあり、江戸時代には一般的な名称であったようだ。かつての熊見川（千種川）は南野中地区付近で西へ向かい、中広・加里屋中洲方面から赤穂城の東側へ流れていた。しかし、明治 25（1892）年に発生した大水害を契機に「亀の甲」とよばれた井堰が撤去され、「尾崎川」と呼ばれていた川が千種川の本流となり、現在のかたちとなった。旧流路は大部分が埋め

立てられたものの、下流部は「加里屋川」としてわずかにその名残を残している。

むかしばなしに登場する秦河勝であるが、赤穂郡に多く存在する大避神社は秦河勝を祭神としており、坂越はその河勝が流れ着き、没した場所であるとの伝承がある。とくに坂越の大避神社は伝承の中心的な存在で、秦河勝の墓所と伝えられる生島も坂越にある。赤穂郡の各地にはこの秦河勝ゆかりの伝説や地名があり、この熊見川のむかしばなしもそのひとつである。

大避神社（坂越）

熊見川跡標柱（加里屋・やなぎ公園）



「熊見川の由来」の舞台

④恋ヶ浜（鷆和）

江戸時代のとある冬の日、岡山の城下から逃げてきた千代姫と富造という男女が、鳥打峠を越えて鳥撫村までやってきました。千代姫は岡山藩の家老の娘、富造はその屋敷に奉公していた下男という関係でしたが、お互いを好きになってしまったのです。当時は武家の娘と下男という身分の差がある者同士が結婚できるわけがありません。そのため二人は岡山を逃げ出し、駆け落ちすることにしたのです。

鳥打峠（鷆和）

ちょうどこの頃、赤穂では塩田の干拓が盛んになり、多くの人々が赤穂へ移住していました。この噂を聞いた二人は、赤穂へ駆け落ちしようと決心し、たどり着いた鳥撫村で生活を始めたのでした。

富造と千代姫は鳥撫村で懸命に働き、暮らしていましたが、富造には気がかりなことがありました。それは千代姫があまり食事をとらずに、日々やせ細っていくことでした。しかし、千代姫は富造の釣ってくる魚だけはおいしそうに食べました。なので、富造は仕事が休みの時はいつも千代姫のために綱崎の岩場で釣りをすることに決めていました。

綱崎（鷆和）

ある日、富造はいつもと同じように釣りに出かけようとしました。しかし千代姫は天気が悪くなりそうなことを心配し、「今日だけは休まれたらいかがですか？私はすっかり元気です。」と富造を引き止めます。しかし、千代姫がおいしそうに魚を食べる姿を見たかった富造は「大丈夫だよ。」といって釣りに出かけてしまいました。

富造が釣りをしていると、次第に天気は悪くなり、ついに嵐になってしまいました。そして富造は波にさらわれて、海に飲み込まれてしまいました。

その後、いつになっても帰ってこない富造を探して、千代姫は綱崎の浜を探し続けました。鳥撫村や真木村の人も総手で探しますが、見つかりません。暗くなっても探し続ける千代姫を無理やり連れて帰りましたが、千代姫は泣き崩れ、何も口にしません。その後も千代姫は綱崎の浜で富造を探し続けました。

一週間が経ったころ、村人が綱崎の浜へ行ってみると、そこには千代姫が倒れ、そのまま息を引き取っていました。帰らぬ夫を待ち続けて、千代姫は綱崎の浜で息を引き取ったのです。

それから、誰ということなく、この綱崎の浜を「恋ヶ浜」と呼ぶようになりました。

恋ヶ浜（恋ノ浜）にはこれ以外にも悲恋の物語がある。安芸広島浅野藩領から流されて住みついた漁師が暮らしていたがその漁師が遭難し、それを悲しんだあまり妻が命を絶った場所、とも言い伝えられており、地域では悲恋の舞台として認識されていたようだ。また、播磨備前の国境であったことから、「恋の松原備前境」ともいわれ、かつては松原となっていたようだ。

昔話に登場する「鳥打峠」は鷆和地区と福浦地区を結ぶ峠道で、昭和 38（1963）年に福浦地区が兵庫県赤穂市に越県合併されるまでは兵庫県と岡山県の県境であり、江戸時代には播磨国と備前国の国境でもあった。

現在、網崎周辺は干拓や工場の建設により大きく姿を変えており、往時の姿は想像するしかない。しかし、恋ヶ浜は現在でも東西約 700 mの長大な砂浜が広がっており、むかしばなしが語る当時の様子を偲ぶことができる。

恋ヶ浜（鷆和）

「恋ヶ浜」の舞台

⑤おさんさん（新田）

大津の船渡（ふなと）というところに、「おさん」という女性が住んでいました。おさんの両親はおさんが生まれた年の流行病（はやりやまい）で亡くなってしまい、遠縁の者に預けられ、おさんはそこで大きくなりました。そして、大人になると、とある男のもとに嫁ぎました。

男は貧しいながらも年老いた母親のために働く村一番の孝行息子で、おさんも夫とその母親のために働き、三人仲良く暮らしていました。

そのころ、浅野家のお殿さまが塩屋の石ヶ崎（いしがさき）に堤防を築いて新たに田畑を造ろうと計画していました。そして、塩屋村と大津村の村人に堤防の工事を行うように命じました。おさんの夫も村人と一緒に堤防を完成させるために働きました。

船渡（大津）

でも何年経っても工事は完成しません。水門の部分が何度造っても壊れてしまうのです。しびれをきらしたお殿様は、「今年の内に何としても完成させるように」と、厳しく申しつけました。

村人たちは庄屋さんの家に集まって相談しましたが、名案は浮かびません。

二日目、それまで黙っていた組頭が、「昔から難工事には人柱（ひとばしら）をたてるとうまくいくといわれとるが、、、」と話しました。これを聞いて、村人全員が人柱をたてるしかないと思いましたが、人柱になる人のことを考えると、何もいえません。村人たちは長い間、黙（だま）ったままでした。

現在の堤防と新田水門（新田）

突然、おさんの夫が立ち上がり、「今から裸になって自分の褌（ふんどし）をみせて、褌につぎあてがあるもんが人柱になることにしたらどうや？」といいました。村人たちは何のことか分かりませんでしたが、みんな裸になりました。しかし、みんなの褌につぎあてはありません。

「これで決まりやな。つぎあてのある褌をしてるのはわしだけや。」と、おさんの夫は自分のつぎあてのある褌を見せながらいいました。おさんの夫は、自分の褌につぎあてがあるのを知っていたのに、このような人柱の選び方をしたのです。

おさんの夫は家に帰ると、自分が人柱に決まったことを伝え、年老いた母親の世話を頼みました。おさんは黙ってうなづくと、夫は安心し、寝間に入っていきました。

夫が眠ったのをみると、おさんは夜も遅いのに組頭の家へ向かいました。そこで、「えろう遅くにすんません。話は夫から聞きました。人柱に反対はしまへんが、1つだけお願いがあります。私を人柱にしとくんなはれ。夫には年老いた母親がおります。残されるお母さんがかわいそうだす。私の実の親は亡くなっておりますし、褌につぎあてをあてたのも私だっさかいに。」とおさんは組頭に必死に頼みました。

組頭はおさんの必死の気持ちを受け入れ、おさんを人柱にすることに決めました。

おさんが人柱になったためか、水門の工事はまもなく完成し、広い田畑と新しい村ができました。このとき新しくできた村が、塩屋の新田だということです。

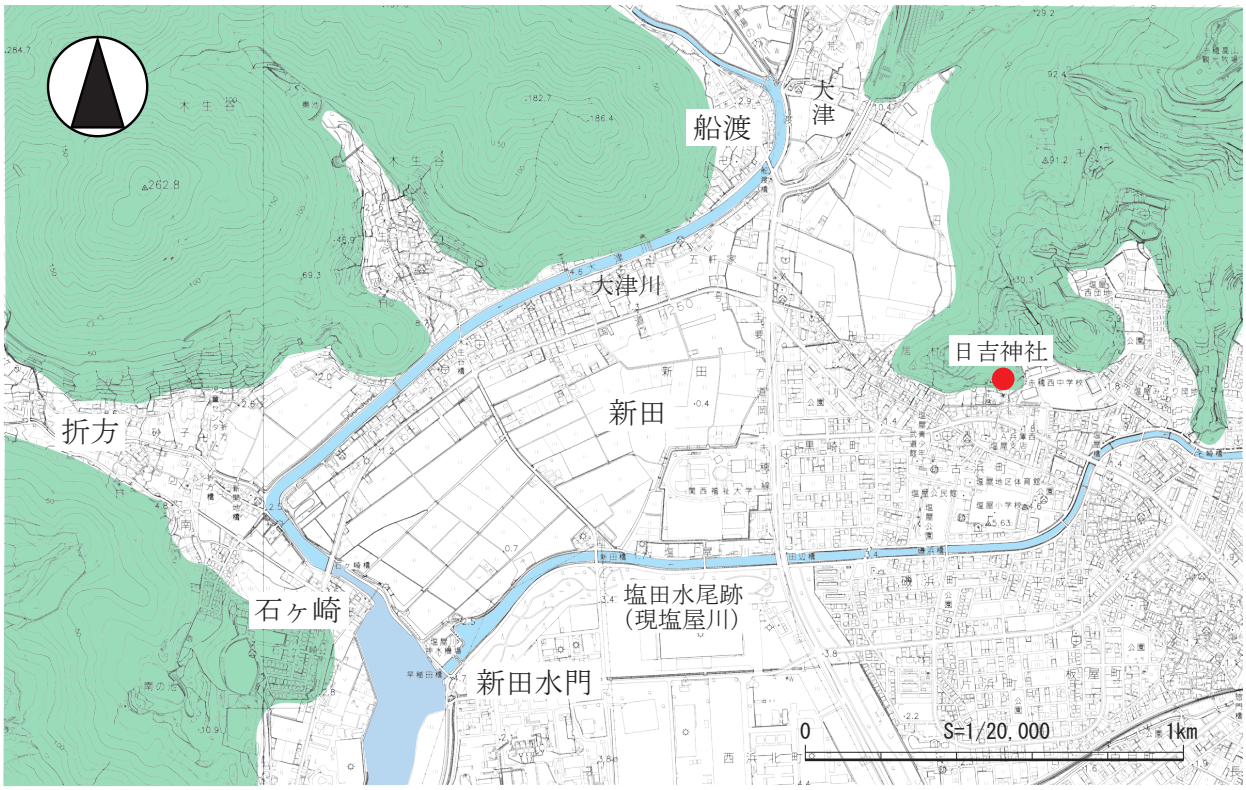
おさんさんは今も新田にある日吉（ひよし）神社に祀られています。

堤防などの難工事に際して人柱を立てる、という悲しい物語である。市内では福浦地区の堤防（沖の大堤防）を岡山藩が築こうとした際にも人柱が立てられたとの伝説があるという。

新田地区は藩主浅野家が正保３（1646）年から寛文５（1665）年にかけて干拓・造成し、新たに「戸嶋新田村」として開発したことが分かっている。日吉神社は新田居村にある新田村の氏神で、新田村に住民が定着し始めた承応元（1652）年に、浅野長直によって滋賀県の山王大権現宮（日吉（ひえ）神社）から分社したと伝わる。

浅野家によって干拓が行われた土地（新田）

日吉神社の秋祭り（新田）



「おさんさん」の舞台

⑥横谷（よこたに）の八畳敷（はちじょうじき）（塩屋）

八畳敷岩（塩屋）

塩屋の横谷には、「八畳敷」といわれる広い岩場があります。

むかしむかし、セミの鳴き声が一段と激しい夏の日のことでした。塩屋から木津に抜ける峠道を、一人の旅人が歩いていました。

不思議なことに、真昼だというのにあたりが暗くなってきました。「おかしいなぁ」とおもっているうちにあたりは完全に夜のように真っ暗になり、加えて我慢できないほど寒くなってきました。

旅人はガタガタと震えながら「こりゃ大変だ。どこかに休ませてもらえる家はないか？」とあたりを見回すと、小さな明かりが見えました。そこにはボロボロでしたが小屋がありました。障子の穴から中をのぞくと、老人が囲炉裏（いろり）で火を焚いています。「寒かったら、こっちへきてあたれや。」と招いてくれました。

喜んだ旅人は囲炉裏のそばへ座ると、暖かくなって眠くなり、いつの間にかぐっすりと眠ってしまいました。旅人が寝てしまったのを見届けると、老人は自分の金玉を引っ張り出し始めました。その金玉が段々大きく、一畳、二畳、、、、そして八畳の広さになると、「バサッ！」と旅人にかぶせて、包み込んでしまいました。老人が八畳敷の金玉を手でもんでいくと段々小さくなり、元の大きさに戻るころには、中に包まれてしまったはずの旅人の姿は無くなっていました。

数日後、旅人の身内の者が行方を訪ねて塩屋にやってきました。塩屋村の村人たちは、旅人を探して山へ入りましたが、みつかりません。村では「旅人は化け物にさらわれた」と噂が立ち、だれも峠へ近づきません。「化け物を退治したる！」と山に入っていった若者もいましたが、帰ってきませんでした。

夏の暑い日が続いていたある日、親戚が急病になったということで、一人の男がどうしてもこの峠を越えなければならなくなりました。案の定、峠に差し掛かるとあたりは暗くなり、雪まで降ってきました。

しばらくすると小さな明かりが見え、やはり小屋がありました。そこで「寒かったら、こっちへきてあたれや。」と老人に招かれ、囲炉裏へ座りました。男は老人の顔をみようとしますが、顔はどうしても見えません。そのうち眠くなってきましたが、「こりゃおかしいぞ」と思いながら必死で寝まいとしていたためか、それとも母親が出かける前に入れてくれた苦いお茶のせいか、目が閉じていても意識ははっきりとしていました。

若者が目を閉じたので、すっかり眠ってしまったと勘違いした老人は、やはり金玉を引っ張り出し、一畳、二畳、、、と広げていきます。七畳半に広がったときです。若者はパッと目を開けると、燃えている薪をつかんで風呂敷のように広がった金玉の真ん中に「グサッ！」と突き刺しました。

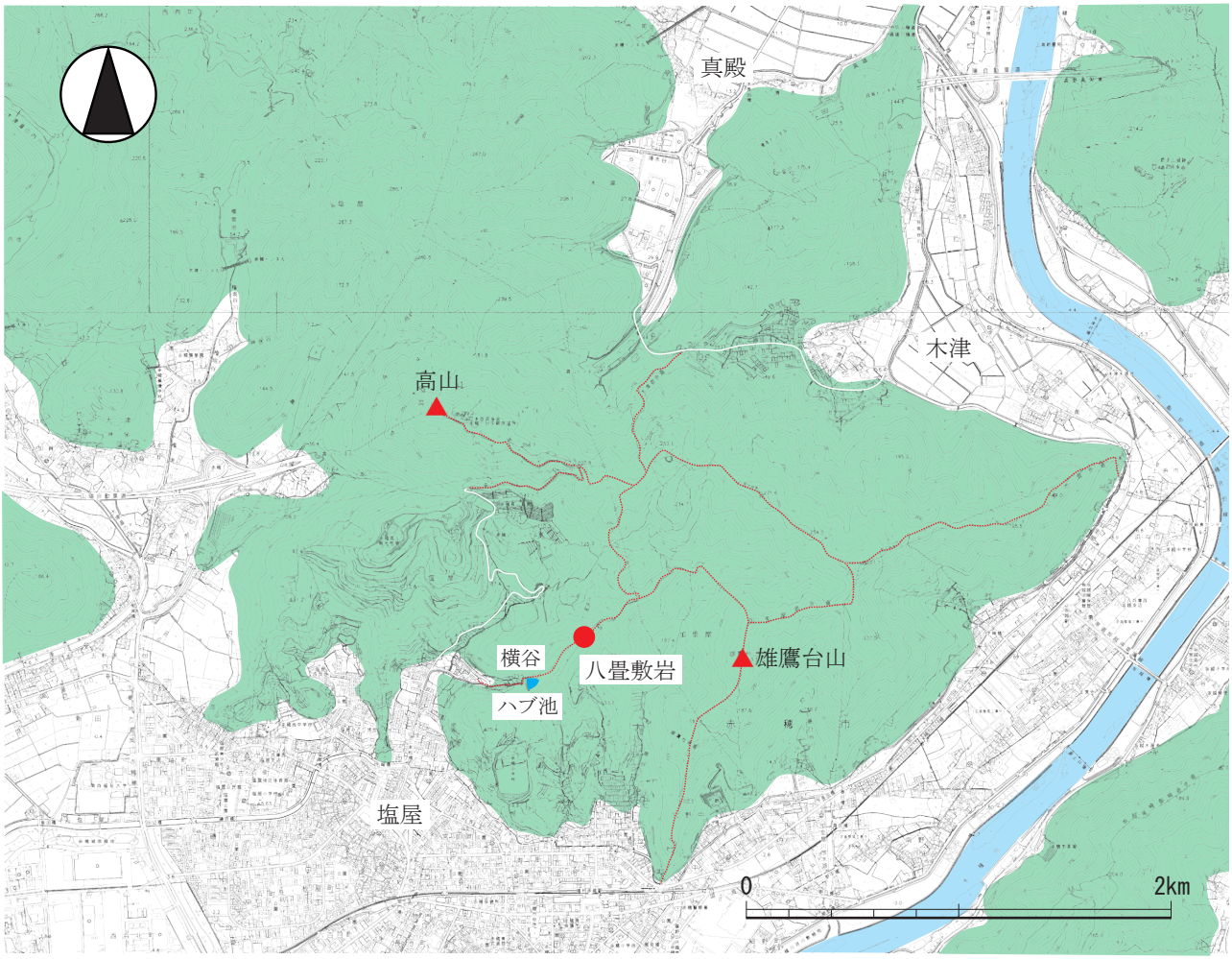
「ギャーッ！」という声があがり、家も囲炉裏も雪も、一瞬のうちに消えてしまいました。そこには夏の太陽がギラギラと照り付けているだけでした。

その後、同じ場所に薪を取りに行った人が、下半身を焼かれた大きな古狸の死骸をみつけたということです。

山に入った人が狸に化かされる、という話である。狸の大きな金玉に包まれてしまうという笑い話にも聞こえるが、行方不明になってしまう点など、恐ろしい存在としても語られている。市内では、動物に化かされる話は狐に関するものが多く、この話のように狸が登場するものは珍しいようだ。

塩屋地区の「横谷」とは、高山への登り口付近にある谷のことである。ハブ池の東側から北東へ向かう峠道のある谷で、この道は塩屋方面から木津・真殿方面へ向かう際に利用されていたという。

現在でも登山道が雄鷹台山や高山方面から存在し、登山道の途中に八畳敷岩の姿を見ることができる。周辺は鬱蒼とした山林になっており、むかしばなしが語られた当時の様子を感じることができる。冬季を除いて、見学はやや困難である。



「横谷の八畳敷」の舞台